

5・12 中国四川大地震の震災遺構を見に成都へー震災遺構と地震博物館に感動！

7月12日～16日、中国四川省成都に行ってきました。目的は、パンダや四川料理（辛い麻婆豆腐）ではなく、四川大地震の遺構を見るためです。

1日目は、汶川県映秀鎮に行きました。ここでは漩口中学校の建物が壊れたまま保存されています。校舎の中には入れませんが、校舎の周りを歩いて見ることができます。表には、各教室の番号を書いた立札があります。校舎の上の方の丘に、地震博物館があります。壊れた自動車や自転車などの遺物が展示されています。パネルでは、救助の様子がよくわかります。広場で泣き叫んでいる人や、点滴を受けている人、タンカで運ばれている人もいます。パネルは余りにもリアルすぎて、かつ被災者が大写しで写っているので、日本人には向いていないかもしれません。避難所で、被災者が食事をしているパネルがあります。日本でのおにぎりやパン・冷えた弁当ではありません。テーブルには、四川料理が並んでいます。中国での私の食事は、麺や炒飯です（日本円で300円ぐらい）。被災者の方が、私よりもごちそうを食べています。

その後、大地震の震源地に行きました。ここには、大地震を忘れないために、大きな石の記念碑が置かれています。

2日目は、綿竹漢旺鎮に行きました。ここは大きな工場があったところで、工場や宿舍の建物が、壊れたまま残っています。この地区を見て歩くだけで、30分はかかります。ここにも、地震博物館がありました。ここも、入館料は無料です。中国共産党の指導者の写真があります。皆が、被災者に直接にマイクで訴えています。日本のA首相のように、桜島をバックにしたパフォーマンスの写真はありません。館内を周って見て、中国共産党が大地震からの復興を指導した、という宣伝臭も感じられました。

海外の救助隊のパネルがあります。韓国の特殊救助隊（72時間以内に救助をするため）、台湾赤十字社の救助活動・英国の医療救助活動のパネルがあります。パネルの上には、感謝の言葉が書かれているようです（中国語がよく分からないので）。なぜか、日本の救助隊の写真がありません。日本が中国からどのように見られているのかが、分かります。（S主席は、A首相とゴルフをしている暇がないからなのか？）

四川大地震での被害の2割が学校でした。被災した生徒も多かったです。学校建築の手抜き工事が、大問題になりました。

【成都で考えたこと】

- ① 日本は世界一の災害王国（原発事故の人災もある）なので、防災省を設置する。
- ② 自衛隊を、海外でも災害救助をする部隊と、国内だけで戦争をする部隊に分ける。
- ③ 過疎地での災害は復旧はしない。財政破綻の可能性もあり、国土強靱化は不可能。
- ④ 過疎地の被災者は、コンパクトな市街地で生活再建を図る。
- ⑤ 被災者の食事について、マクドナルド等のファーストフード店が協力する。

【地震時の時計のモニュメントがある漩口中学校（汶川県映秀鎮）】



【被災した工場の建物と地震記念碑（綿竹漢旺鎮）】



【中国 四川大地震】発生日時：2008年5月12日14時28分 震央：中国四川省アバ・チベット族チャン族自治州汶川県 規模：マグニチュード7.9 死者6万9,197人、負傷者37万4,176人、行方不明1万8,222人（7月21日現在）倒壊家屋21万6千棟、損壊家屋415万棟（7月14日現在）避難した人1,514万人、被災者4,616万865人

※ 成都是パンダの故郷 避難誘導の優先順位は、1にパンダ、2に中国人民